

名古屋市立大学人間文化研究叢書  
反響する文学

土屋勝彦 編  
風媒社 2011 (264頁)



名古屋市立大学大学院人間文化研究科  
(こばやし・かおり)  
小林かおり

「世界文学」を超えて

「世界文学」という言葉を聞いて私が真っ先に思い出すのは、実家にあった世界文学全集である。赤味を帯びたオレンジの装丁が重々しく、トルストイ、ゲーテ、シェイクスピアなど古典作家の作品が一列に並んだ様子は壮観で、我が家の居間に重厚さを与えていた。いま、「世界文学」そのものの定義が見直されている。池澤夏樹個人選による世界文学全集が辺境や女性に目配りし、評判を呼んだ

のは記憶に新しい。また、デイヴィッド・ダムロツシユは著書『世界文学とは何か』のなかで世界文学そのものが時代や社会、読者によって自在に変わる可能性を持つことを示している。二〇一一年にはダムロツシユを迎えてシンポジウム「世界文学とは何か？」が東京大学で開催された。「世界文学」は権威のある古典という図式は既に成り立たなくなっている。

こうした昨今の状況を本書『反響する文学』は映し出すものである。本書の前書ともいえるべき『越境する文学』（水声社、二〇〇九）では「近年の文化活動のなかで、新風を吹き込む越境的な文化活動に注目」した（九頁）。さらに、本書『反響する文学』では「越境的な文学や移民・亡命文学等の諸相を：再考察し、響きあうインターテクスチュア性のあり方を問い直し」、「移民・亡命文学」や「ポストコロニアル文学」から『世界文学』への展開と可能性を探求している（一〇頁）。

本書は英語圏、日本語圏、ドイツ語圏、東欧語圏だけではなく、アラブのフランス語圏を含む地域での文学作品や文化事象に幅広く目配りし、これまでの「世界文学」のキャノンを大幅に読みかえる意

欲的な試みだ。しかも、それぞれの領域で取りあげる作家は既存の「国民作家」ではない。前書『越境する文学』と同じく、ここで取りあげられているのは移民・亡命などによって越境する作家たちの作品や作品を生み出す文化的・社会的コンテクストである。従来のキャノンや正史が取りこぼしてきた領域の文化活動に注目する、これが本書の第一の意義であろう。

たとえば、鶴戸聡の論文はアルジェリア・レバノン・エジプトの近現代文学史について論じ、井上暁子の論文はドイツで書かれたポーランド語文学に焦点を当てている。また、山本明代の論文はアメリカにおけるスロヴァキア系移民の歴史を取りあげ、移民の集団的経験を検証するものである。アメリカに渡ったスロヴァキア系の移民が政治力や経済力の脆弱さのために集団的祝祭を行う際に困難な状況に陥り、祝祭がアメリカ化をよりよく推進する機会ともなった複雑な経緯を詳細に取りあげている。「越境経験のアイデンティティの複数はアメリカのスロヴァキア系集団のような境界的な存在を通してより明らかにすることができないのではないだろうか」（一四四頁）との指摘は正史研究

だけではけして見えてこないものである。

『反響する文学』の第二の意義は、越境する作家たちの言語に焦点を当て、「響きあうインターテクスチュア性のあり方」を読み解いている点である。編者の土屋勝彦の言葉どおり、本書は「言語改革者、不可視の経験の表現者としての果敢な試みを、通時的な歴史の流れではなく、時代と地域を超えてつながるインターテクスチュア性、インターカルチュラルリティのもとに解読・再読・再発見する試み」（一一頁）であり、この試みは大いに成功している。越境作家たちは言語を外側から見つめることによって新たな「ことば」を創出する。『反響する文学』に収められた多くの論考は、越境作家たちが生み出すディコンストラクション的な意味のずれに注目し、そこに新たな意味、可能性を読み込むものだ。この意味において本論集はキャノンを読み変えるだけの越境作家文学選集を超えている。

たとえば、田中敬子は、フォークナーの後期小説『寓話』に焦点を当て、ローカルからグローバルへと続くフォークナーの想像力の展開を追う。「国民作家」フォークナーの作品のディコンストラク

クナーの作品のディコンストラク

シヨンの意味のずれ、メトニミー、明確なメッセージの消失に新たな可能性、越境性を見出す試みは既存の「古典作家」を読み直す契機を示唆するものである。また、谷口幸代の論文はドイツ在住の作家多和田葉子の作品を丹念に読み込み、「鳥、並びに鳥の声は、多和田の文学において複数言語が相互に反響する表現形式のメタファーであり、共同体の常識や価値観から逸脱した異質な他者性を示す」(一七三頁)と結論付ける。多和田作品の「ことば」を詳細に読み込んだうえで論理的に出された結論は説得力をもつ。スリリングな論考だ。また、レオポルト・フエダマイアーはトルコ人ドイツ語作家E・S・エツダマを取りあげ、彼女の「ことば」が見慣れた日常を異化する過程を称賛する。

昨今の文学研究が歴史学や社会学、ときに政治学などを流用する傾向が強いなか、『反響する文学』は作家の「創造的表現」に着目する。『移民文学』から『世界文学』へと題されたシンポジウムの報告のなかで「異郷的な視線はときに内部にあるナショナルな言語構造と衝突し、変質してそれを駆逐する。そのとき新たな創造的表現が現出する。これは移民作家のみならず、優れた作家たちが持つ本能的な言語革新のプロセスである」(二五三頁)と土屋は述べている。作家の「創造的表現」の探求——我々文学研究者が文学の本質そのものやテクストの「ことば」の研究から遠ざかってきた姿勢に警鐘を鳴らす試みである。

ただし、残念なことに、「反響する文学」ということばが耳慣れない。「はじめに」で土屋が語るように「越境する文学」から相互に多言語が反響しあう『エクソフォン文学』や『オムニフォン文学』への拡大と深化」(一七頁)を狙い定めて「反響する文学」という呼称を用いたのであるが、すんなりと理解しがたい。「移民・亡命文学」や「ポストコロニアル文学」といったカテゴリーを越えて行く文学を総括して「越境する文学」とし、混成的なエクリチュールの特質や響きあうインターテクスチュールのあり方に焦点をあてたところに本論集の新しさがあるのだが、「反響する文学」ということばからこの斬新さは喚起されにくいのではないだろうか。

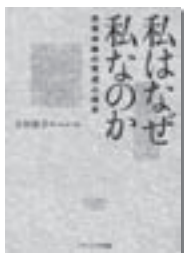
また、「国民文学」、「移民・亡命文学」、「ポストコロニアル文学」といった既存のカテゴリーに縛られないトランスカルチュラルな領野を開拓する試みには意義がある。しかしながら、「緊張状況に立ち向かう人間が、自分自身と状況に対して恒久的な障害としてではなく、むしろ創造的な刺激として周囲世界に向かうとき、異化された文学的想像力による混成的表出の発露が見られる」(一六頁)とするならば、すべての作家は「反響する文学」作家となりえるであろう。しかしながら、本論集で取りあげられているのは、物理的に母国を離れた作家たちや東欧、アラブ世界といったある種「特殊な」領域での文学活動であり、「国民文学」や英米、ドイツを中心とした既存の「世界文学」を意識するあまりに振り子が特殊でマイナーな文学へと傾いているのはたしかである。昨今、人種・性別・階級におけるマイノリティの声に耳を傾ける傾向が強い。しかしながら、マイナーであること≠価値がある、という図式は再考する時期にきているのではないだろうか。

さらに、「はじめに」触れられた「ポストコロニアルな文学現象に関する文学理論の再構築」(一〇頁)という課題の究明はなされていくのだろうか。中村隆之はエドゥアール・グリッサンの思想のうちに見出せる新しい文学の捉え

私はなぜ私なのか  
—自我体験の発達心理学

天谷祐子 著  
ナカニシヤ出版 2011 (177頁)

名古屋市立大学大学院人間文化研究科  
(すぎがら・ますね)  
鋤柄 増根



以前、この著者の論文を読んだ、私自身が小学校四年生の頃に考えていたことが「自我体験」というのだということを知りました。さらに、今回この著作を読むことでその体験の意味などをまた考えさせられることになりました。

私の「自我体験」は、死んだら自分の魂はどうなるのか、他人の体に入り込むことでそのまま継続するのか、もし継続するのなら今の自分の魂はだれのものであった

のか、もし魂が入りこんだらその魂が働き出すのはすぐなのか、外国の人の体に入ったら私の魂はすぐその国の言葉を話せるようになるか、など切りなく考えていたことを思い出しました。この体験は、本書によれば「起源・場所への問い」に分類されるのだと思います。そして直接のきっかけは、小学校の体育館で「世界大戦争」(一九六一年)という映画を見て、人類は滅亡してしまうのだと思ったこと(おそらく封切りから何年かたったものを見たのだと思います)だったと思います。さらに、その前に叔母がなくなり、まだ土葬であったのを見たこと、そしてすぐ近所の比較的親しくしていた家のお母さん(私の母より若かった)が突然亡くなったという体験があつて、死に対して何か恐怖がその下地にあつたからだと思います。

このようなことを考えるのは何年か続きましたし、やはり寝つきが悪かったことが思い出されません。しかし、今や全く考えもしないし、むしろこのような問いは無意味だと思ふようになっていきました。人間は遺伝子を伝えるための単なる運搬物だとか、人間は単なる物質なのでから死んだら必ず

物体に戻ってしまい、魂と言われるものもそれと同時に無くなってしまうものだと割り切ったからです。ですから、自分の死後のことはどうでもよく魂が残るから供養をちゃんとしてほしいなどということもあまり思いません。このようなことは、著者のあとがきで述べている折り合いをつけたことに相当するのかもしれない。私の場合は、この折り合いがついたのは大学生の頃でした。

以上のことから、このテーマについてかなり親近感を持って読むことができました。かなり多くの子供がこのような体験をしていることを読み、子どもながらもなかなか考えているのだと感心もするのですが、一方で、このようなことを言語能力の低い段階で考えることはひょっとしたら幸いなことかもしれないとも考えました。この「自我体験」のネガティブな影響を考えると、言語能力の低さからある程度ところで思考が進まなくなり、自己の存在意義にまで踏み込んでしまわないように人間はできているのだと妙に感心もしました。この著者も触れていますが、このような体験を報告できることには、言語能力の違いが、年齢が若くなるほど大きく影響してお

り、研究方法の工夫が必要になってくるだろうし、言語能力の違いの影響を取り除くとはとんどの人が体験しているという可能性もあるのでしょうか。

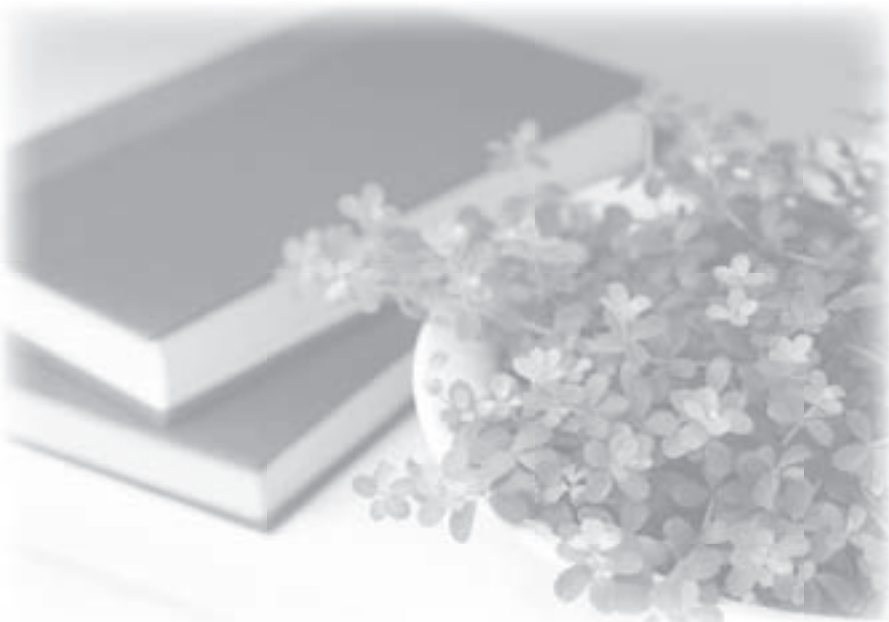
そこで著者も触れていることですが、ピアジェの認知発達との関係が今後問題になるのだと思います。つまり、ピアジェの認知発達における具体的操作の段階(七、十一歳)に多くの人がこの「自我体験」を初めて体験しており、形式的操作が可能になる段階(十一〜十五歳)の少し前であることとの関連がどうなっているのか気になりました。ただ、ピアジェの言うような形式的あるいは抽象的な思考様式は、この「自我体験」という抽象的な対象を考える能力とは関係ないと考えることも可能だと思えます。つまり、ピアジェは思考様式の話をしており、この「自我体験」は考える対象が抽象的なだけで、思考様式は具体的操作の段階のものであるということ、特段関連がある訳でもないかもしれません。いずれにしても、この関連がどのようなものなのか興味のあるところです。

さらに、エリクソンの発達段階との関連もどうなっているのかも興味のあるところです。エリクソ

ンの漸成説によれば、この「自我体験」が初発する年齢は、「生産性対劣等感」が心理社会的危機になつている段階であり、フロイトで言えば潜在期となります。この学童期にあたる時期は行動的には比較的穏やかな時期とされていますが、この「自我体験」から考えるとそれなりに内面的には大きく揺れ動く時期であると言えます。この体験が後のアイデンティティの確立にどう関係するのかが明らかにされるといいと思います。しかし、著者も言っているように青年期の自我の問題と「自我体験」での自我の問題とは異なるのだと思います。つまり、青年期のアイデンティティの確立は社会に出ていくうえで自我の確立であり、その不安との戦いと考えることができますが、「自我体験」の方はもっと純粋な問いかけなのかもしれません。

最後に、「自我体験」というとらえにくいものを、主に面接法と質問紙調査法という二つの方法をバランスよく使い、客観的に研究しつつ、個人の内面を探るといふこの研究の方法は、見習うべきものだと思います。また、発達心理学の研究として、横断研究を実施しそのあとに縦断研究をするとい

うのも、発達の一つの大きなテーマを扱ったときの研究としては、やれそうでなかなか実施できないものであり、その意味でも重要な研究と言えらると思います。さらに、実証科学である心理学が、ともすれば客観性と計量化に傾き、その中で発達研究は複雑で華々しい多変量解析を多用することが大きな流れとなつていきます。その流れに抗して、この研究のような方法を取ることで、個性記述的な部分と法則定立的な部分とをやり方によってはうまく統合できるのだというところを見せてくれた研究とも言えます。これから発達研究をする学生さんに参考にしてもらえらるいいと思います。



## なぜからはじめる保育原理

池田隆英・上田敏文・  
楠本恭之・中原朋夫 編著  
建帛社 2011 (134頁)



名古屋市立大学大学院人間文化研究科  
(こが・ひろゆき)  
古賀弘之

本書は、「学生の皆さんが学びやすいテキスト」の作成を目指して執筆された。内容は二〇一一年度から始まる新カリキュラムに対応できるように、『保育士養成課程等の改正について(中間まとめ)』における「教科目の教授内容の改正案」を参考にして構成されている。具体的な構成内容は「保育に関する最も基本的な考え方」を網羅するべく、一、保育の意義、二、保育の基本原理、三、保育の内容と方法、四、保育の思想と制度の

歴史、五、保育の現状と課題、となっている。

本書の特徴は、「根拠をもった論述」を強く意識しているというコンセプトにある。このコンセプトが、タイトルの「なぜからはじめる」という表現に集約されている。つまり、「保育に関する最も基本的な考え方」について「なぜ」という問いの視点から内容を知ること、保育原理を学ぶ必要性が感じられるよう著述されているのである。したがって、本書で扱われている保育に関する何らかの意見、主張、解釈、認識については、その根拠として統計や文書等の資料を示しつつ論述するよう配慮されている。

以下に本書の章構成を示す。

- 一章 保育の理念と概念
  - ―なぜ保育という言葉が生まれたのか?―
- 二章 保育対象としての子ども
  - ―なぜ子どもを保育するのか?―
- 三章 福祉としての保育
  - ―なぜ保育所は必要なのか?―
- 四章 保育所保育指針の考え方
  - ―なぜ保育所では教科書を用いないのか?―

五章 発達過程に応じた保育

―なぜ子どもの発達理解は大切なのか?―

六章 保育実践の構成原理

―なぜ保育実践が成り立つのか?―

七章 保育のねらいと内容

―なぜごっこ遊びをするのか?―

八章 遊びと環境構成

―なぜ保育所には遊具があるのか?―

九章 保育実践のPDCAサイクル

―なぜ保育者は記録をとるのか?―

十章 保育の思想史

―なぜフレールベルは幼稚園を作ったのか?―

十一章 日本の保育の制度史(戦前)

―なぜ幼稚園には机とイスがあるのか?―

十二章 日本の保育の制度史(戦後)

―なぜ保育所と幼稚園があるのか?―

十三章 保育における地域連携

―なぜ保育所に地域の人があるのか?―

十四章 保育者支援における保育士の役割

―なぜ保育所では教科書を用いないのか?―

―なぜ保育士は保護者に声をかけるのか?―

十五章 保育職務の全体像  
―なぜあなたは保育社になりたいたのか?―

本稿では、本書の中から上田敏文(二〇一〇年四月に本校に赴任)の執筆箇所である「九章 保育実践のPDCAサイクル ―なぜ保育者は記録をとるのか?―」について紹介する。まず九章の概略を述べ、次に感想・批評を述べる。

### 〈概略〉

保育実習では実習記録をとり、毎日提出することが義務付けられている。実習を行う中で記録をとることは大変な作業であり、記録をとることに對し否定的な感情をもつことも考えられる。そこで本章では、「なぜ保育者は記録をとるのか」という問いにもとづき、保育の仕事において記録をとることの意義について、保育者の専門性の向上と保育の計画の二つの観点から述べられている。

まず、保育者は「何を」「何のために」記録するかという問いがあげられる。この答えとしては、「保育の一日の流れ」を「保育を振り返るために」記録していると

述べられている。すると、今度は新たに「なぜ保育を振り返ることが必要なのか」という問いが生じる。この答えとしては、ドナルド・ショーンの概念を用いて明らかにしようとして試みられている。ここでは「行為の中の知」、「行為の中の省察」、「実践の中の省察」の概念を用い、実践場面と関連付けた説明が行われている。

「行為の中の知」とは、実際の保育実践の中からある種の知識・技術を習得していくことである。「行為の中の知」は、振り返りを行うことで意識的に獲得することができる。

「行為の中の省察」とは、実践場面において過去の経験から類似した場面を想起し、そのときどのように行ったのかを瞬間的に振り返ることである。「行為の中の省察」は、それぞれの幼児の様子や状況に臨機応変に関わっていく際に役立てることができる。

「実践の中の省察」とは、行為の中の知と省察を実践の中で繰り返し深めていくことである。つまり「行為の中の知」を蓄積して、引き出しの多い保育者となり、「行為の中の省察」を深めて、一つの状況から多様な可能性を読み取ることのできる保育者、となること

で、保育者としての専門性を高め、自らの保育に対する方向性を定めていくことができるのである。

したがって、「なぜ保育者は記録をとるのか」という問いに対する答えの一つは、「自らが経験した保育を、記録として明文化することで保育を振り返ることを可能にし、保育者としての専門性や力量を高めていくためであると言えるだろう」ということである。

次に、保育の計画の観点から「なぜ保育者は記録をとるのか」という問いへの答えを探っている。

保育の計画は、実践を行い、記録をとり、省察を行い計画を立てるため、そのときどきの幼児の実態や状況に合わせて計画する必要がある。その計画を立てるためには保育を振り返り、「何を改善するか」を明らかにしなければならぬ。このような保育実践の考え方はPDCAサイクルと呼ばれている。

PDCAサイクルのPDCAとは Plan、Do、Check、Action、の頭文字であり、Planは保育の「指導計画」を作成する、Doは作成した指導計画にそって保育を「実践」する、Checkは実践された保育を「省察」する、Actionは実践された保育を見直し「改善」

する、という内容を意味している。つまり、PDCAサイクルの考え方にもとづき、より良い保育の計画を立てるためにも記録をとることが必要なのである。

最後に、まとめとして「数か月から数年を見通した長期的な見通し、昨日から今日・明日への保育を考える短期的な見通し、その瞬間での子どもの姿からのフィードバックを通した振り返りという、複層性の中での見通しや振り返りが必要である」ということが述べられている。この見通しや振り返りのために記録をとり、読み返すことが必要であると締めくくられていた。

#### 〈感想・批評〉

以上、「九章 保育実践のPDCAサイクル ―なぜ保育者は記録をとるのか?―」の内容について概略を述べた。本章では、学生が実習で負担に感じることの多い記録をとることの意義について、保育者の専門性の向上と保育の計画の二つの観点から述べられている。具体的には、ドナルド・ショーンの提唱した「行為の中の知」「行為の中の省察」「実践の中の省察」という理論的な概念と、保育におけるPDCAサイクルのモデルに

もつづいた論述であった。

「行為の中の知」などの概念に関する内容については、保育士や幼稚園教諭に関わらず、教育に携わる仕事を目指している学生には学んでおいて欲しい知識であると思われた。しかし、概念の説明は難しいため、実際の記録を例として取り上げるなど、もう少し具体的な説明を加えても良いのではないかと感じた。

PDCAサイクルについては評価の話題の際にはしばしば取り上げられる内容であるため、理解しやすく説得力のある記述であったと思われた。

九章の「なぜ保育者は記録をとるのか?」の結論としては、保育者がより良い保育を実践していくためであり、最終的には保育者としての自分のためであるという内容であるように感じられた。記録をとる意味を保育者が理解しておくことで、実習においても仕事においても記録に対する姿勢が積極的なものとなるだろう。今後の保育の向上のためにも、ぜひ多くの方に読んでほしい内容である。

## 御母衣ダムと 荘白川地方の50年

浜本篤史 編  
まつお出版 2011 (110頁)

名古屋市立大学大学院人間文化研究科

(あかみね・じゅん)  
赤嶺 淳



わずか一一〇頁の本書から、わたしは多くのことを学び、勇気づけられた。編著者である浜本が一貫してとりこんできたダム開発をめぐる研究視点のみならず、かれが抱く調査対象地への想いと、学生への教育姿勢の三点に感銘をうけたからである。

浜本が本書を「御母衣ダムと地域社会について深く知るための手がかり」と位置づけるように「五頁」、本書は、一九六一年に完成した御母衣ダム建設からすでに五

〇年が経過し、この事業に対する地域社会の「集合的記憶」が薄れつつあることをふまえ、同ダム建設に関する技術的／社会的ストーリーを軸として、現在の高山市荘川町と大野郡白川村(荘白川地方)の人びとが経験してきた歴史と現在を叙述したものである。

福島第一原子力発電所の事故以来、快適な生活様式を享受できる根幹として電力供給が不可欠であることを、わたしたちは再認識したはずである。本書では、御母衣ダムの開発を手がけた電源開発株式会社社の解説を通じ、戦後復興と高度成長をささえてきた電力行政についての理解が深まるよう工夫されており、期せずして時宜をえたものとなっている。

近年、ダムマニアなる、ダムの技術的側面に関心をもつダム愛好家が少なくないことを指摘したうえで、浜本は、本書の読者層として、こうした人びとと、「集合的記憶」が薄くなった地元の若年層を読者に想定したという。しかし、水力であろうと、原子力であろうと、列島各地の発電所ごとに存在するであろう、こうしたストーリー群は、電力の消費者であるわたしたちこそが知っておくべきではないか。これが、本書を読み終

えたわたしの率直な感想であり、これまでこうした視点をもってこなかった自分を恥じいった。

浜本によると、六章からなる本書は、ゼミ生たちとの共同研究の中間報告であり、Ⅲ章「移転した人々と補償」と、Ⅵ章「今後の活性化へ向けて」をのぞく各章の下書きを学生がおこない、最終的に浜本が事実確認をすすめながら、文体を統一したという。巻末にあげられた文献をみるかぎり、資料の出典は、村史や村の広報誌をはじめ、多岐にわたる各種の新聞報道や自費出版の著書のたぐいである。読者層がことなるそれぞれの媒体で採用された、さまざまな文体を、平易な読み物として統一する作業は、苦勞の連続であったにちがいない。

しかし、「だが、だれに向かつて語るのか」という歴史叙述にまつわる問題を考慮した場合、本書も、責任の所在をはっきりさせるため、あえて学生をまじえた分担執筆でもよかったのではないだろうか、との疑問もくはない。著作としてのまとまりからすると、たしかに文体の統一は理想的である。しかし、(教育効果も狙った)共同研究だからこそ、各著者の視点が活かされるかたちでの報告書

もありえたのではなからうか。

わたしは参加できなかったものの、その後の分析結果をたずさへ、浜本らは二〇一一年一月に白川村と荘川町で「御母衣ダムの社会的影響と地域活性化」調査報告会」を実施したと聞いている。調査実施から一年以内に、こうした成果還元をスピーディーにおこなうという研究姿勢は、わたしたち社会調査にかかわるものが見習うべき誠実さである。当然、そこで得た知見は、今後の研究に還元されていくわけであり、こうした現場と研究室を往還するプロセスをともにする学生にとっては最高の学習機会となったにちがいない。

編著者がみとめるように、これは中間報告である。そんな性格をもつ本書にどこまで期待してよいやら定かではないが、個人的には高度経済成長やバブル経済といった荘白川地方をおおった日本史的イベントや世界遺産への登録といったグローバルなイベントを、それぞれの地域でくらす人びとのレベルでとらえてもらいたかった、と感じている。否、こうした問題は、今後の作品群で展開されていくものと、次作を心待ちにしている。

グローバル社会を歩く①  
クジラを食べていたころ—聞き書き  
高度経済成長期の食とくらし

赤嶺淳 編  
グローバル社会を歩く研究会発行  
新泉社販売 2011 (213頁)

名古屋市立大学大学院人間文化研究科

(とだ・ゆりこ)  
戸田百合子



同時に、学生が高度成長期のくらしを知ることで自分のルーツを確認し、家族、地域、地縁と、その背後にある政治、教育、経済、医療、法律、食糧（農・林・水産業）、宗教、生活習慣等を学んでいく様子が伝わってくる。学生の今後の生き方にも少なからざる影響があることは容易に推測され、哲学の導入にもなりうるのではなからうか。

編者が担当している講義「東南アジア地域研究」で、学生自身がどのような部分を問題として捉え、興味を持ち、考えるきっかけとなるかについて苦慮した結果が、聞き書きという方法であったのだろう。『クジラを食べていたころ』を読むと、予てより編者の、精力的で鶴見流モノ研究志向をほんの垣間見てきた者としては、編者が生活史の聞き書きという指導方法を選んだ理由が納得できる。

クジラは戦後、全国的に学校給食のたんぱく源の主流であった様だ。ここでは栄養面から、クジラの肉の特性を、牛肉と比較しながら確認しておきたい。食品可食部の全窒素1g当たりのアミノ酸評価（一九八五年のFAO/WHO/UNU（二一五歳）のパター）で比較すると、クジラの冷凍

赤肉のアミノ酸スコアは一〇〇であり、牛肉と同様な傾向ではある。

しかし、牛肉の部位によってはトリプトファンが制限アミノ酸となっており、アミノ酸スコアが低くなって、クジラの肉の方が、蛋白質としては質が高いとも考えられる。脂肪の質に関しては、生活習慣予防に貢献すると確認されている多価不飽和脂肪酸の含量を、総脂肪酸一〇〇g当たりの脂肪酸で比較して見よう。クジラの赤肉の生（低脂肪）は牛肉等の肉類のイコサペンタエン酸（EPA）に比べて約一〇倍、ドコサヘキサエン酸（DHA）は約五倍であることが知られている。前者は脳梗塞血栓予防に効果があり、後者は大腸ガンや乳ガンのリスクを減らしアルギー症状を防ぐ効果が指摘されている。

「日本人の食事摂取基準（二〇一〇年度版）」では脂質の生理機能を充分踏まえて、成人の多価不飽和脂肪酸（ $\alpha$ -リノレン酸・EPA・DHA）の一日の目標量下限（二八〜六九歳）は、男性では二・四g、女性は二・二g以上とされ、クジラの畝であれば約五〇g程度食すれば達せられる量となる。クジラ料理をもっと工夫し、食卓に乗せることが求められる所以である。

そうした試みは、実際行われている。例えば、二〇〇二年にIWCの総会が日本の下関で開催された際に、並行して日本捕鯨の中心地の一つだった山口県長門市で「第一回伝統捕鯨地域サミット」が催され、祖先の行ってきた調理方法である各地の伝統料理や創作料理の現代風メニューが紹介・再現された。また、二〇〇五年に下関市で行われた「第四回日本伝統捕鯨地域サミット」では、伝承料理研究家の奥村彪生を招いて、伝統と現代が調和したクジラ料理が紹介されている。奥村の考え方の基本は「食べる事は趣味ではなく、社会背景を含めて生きるために食べること、姿勢を正して美しい箸づかいで美しく食べれば人格も陶冶できる」というものである。

『クジラを食べていたころ』を、自分の経験と照らし合わせみると、クジラ肉については殆ど記憶にないことに気づかされる。このことは、当時の日本においてのクジラの消費のされ方の特徴を示しているように思われる。

評者が生まれ育った愛知県西春日井郡での食生活の記憶は、以下のようなものである。野菜・果物では、春は大山川の土手での摘菜

『クジラを食べていたころ』は、アメリカ、オーストラリア、欧州諸国とは異なる海洋水産国家である日本が抱える多くの課題を、クジラを中心にして、「海」から考えようとする試みであるように評者には思われた。二年生から四年生までの大学生が、高度経済成長期の食とくらしについて身近な人に聞き書きをした十五編の物語は、日本文化の見直しや伝統継承の大切さに加えて、数々の問題提起をおこなっている。



として土筆(卵とじ)、蓬(餅)等、夏はセミ捕り等の後の塩を振ったスイカのかぶりつき、こうせき瓜等の果物類摂取、トマト、きゅうりの丸かじり、かぼちゃ、冬瓜等の煮つけの野菜類摂取、田植え後のほかほかのみようが饅頭、そして秋には野菜類として蓮根、ごぼう、人参等のかきまわし(混ぜご飯)や煮合せ等、台風後の種実類の拾いぎんなん、間食として自家の木登りでもいだ柿(壺柿、渋柿は渋抜き)、畑で摂れたサツマイモのふかし、さとのき(さとうきび)かじりで糖分摂取、隣家のぐみの実や鬼まんじゅう、ぼたもち(おはぎ)等、芋類では里芋、さつま芋、とろろ芋、冬期は野菜類では大根、ごぼう、正月菜、白菜、水菜、根深ネギ等であった。動物性蛋白源やカルシウム源としては、イナゴ、鮎、はえ、泥鰌、鯖、鯛等の魚類そしてかしわ(鶏)の殆ど全ての部位と鶏卵を摂取していたと思われる。植物性蛋白源は豆類の大豆で、豆交換の朝できた手作りの豆腐や油揚げが主流で、ここからもカルシウム源を得ており、昆布やのりからもミネラルを摂取していたであろう。炭水化物として主食は麦ごはんであり(この頃二毛作)、他にうどん、冷

麦、餅、赤飯を食していた。殆どに於いてその時代の旬の食材を食しており、当時は庭で飼っていたかしわや鶏卵も希少価値のある食品であった。そうした食品類等からミネラルやビタミン類等の微量栄養素を摂取していたのであり、調味料は手作りによる味噌(手前味噌)、醤油、塩ではなかったかと推測している。甘味料はざらめ、ズルチン、サッカリンを使用し、かしわの脂身、イナゴもだしとして利用していた様だ。油は、菜種を家々で作り抽出した菜種油を使っていたそうだ。

こうした食生活は、一九八六年イタリアのプラで始まった現代人の食生活を見直す運動に類似していて、結果的に、スローフードを実施していたことになるのだらう。地産地消、韓国の身土不二(食べ物に宿る風土と人体に宿る風土が一致すればするほど体に良い)、アメリカの Community Supported Agriculture (地域が支える農業)運動等に先行していたかのように、物事は循環し、温故知新であるように思われる。

ただ、先にも述べたように、子どもの頃の食事についてはこのような食品類等の思い出ばかりで、クジラ肉については殆ど記憶にな

いことに驚かされる。しいていえば、学校給食で竜田揚げと家ではベーコン、大和煮を少々食した程度であった。

このように自身のクジラについての記憶があまりないのは、私自身が本書の語り部より少し若く、また他のことに大きく気持ちや行動が向いていたためかもしれない。しかし、当時の食のあり方もとで、クジラを普段に食していた人々が、クジラが上がる地域、または流通可能な地域に居住していたことが、より大きな理由として考えられるかもしれない。つまり、クジラは、そうした地方の食文化の中で「故郷の味」として残っていたのであり、「クジラを食べていたころ」は、人の移動・流れの中の食文化の存在を示しているのではなからうか。

『クジラを食べていたころ』が対象としている時代は、経済成長率が毎年平均一〇%を超える勢いであり、日本は資本主義国ではアメリカに次ぐ第二位の国民総生産の規模になっていった。テレビ・洗濯機・冷蔵庫の家電製品が三種の神器として家庭に爆発的に普及し、一九六〇年末以降は、自家用車・カラーテレビ・クーラーの三種の神器がこれにとって代わっ

ていった。消費革命が起き、社会の変貌が見られ、特に農村での変化は激しく、高度成長期の「光と蔭」が顕われ初めていた。

網野善彦は、『忘れられた日本人』(宮本常一著)の解説の中で、「いったい進歩というのは何であろうか。発展とは何であろうか。すべてが進歩しているのでしょうか。進歩に対する迷信が、退歩しつつあるものをも進歩と誤解し、時にはそれが人間だけではなく生きとし生けるものを絶滅にさえ向かわしめつつあるのではないかと思うことがある。進歩のかけに退歩しつつあるものを見定めてゆくことこそ、われわれに課されている、もっとも重要な課題ではないかと思う」という箇所を引用しながら、この指摘はまさしくわれわれ、現代の人間につきつけられた課題そのものと言ってよいと述懐している。まさに、同感同調致すところである。

この指摘を念頭において、評者の幼少の頃の食生活のあり方に近い状況が、現代の食育基本法(二〇〇五年成立)の食育の基本的理念として、第一章第二条、第八条まで規律文で示されていることに注意を払いたい。

そこでは、「国民の心身の健康

の増進と豊かな人間形成」、「食に  
関する感謝の念と理解」、「食育推  
進運動の展開」、「子どもの食育に  
おける保護者、教育関係者等の役  
割」、「食に関する体験活動と食育  
推進活動の実践」、「伝統的な食文  
化、環境と調和した生産等への配  
意及び農山漁村の活性化と食料自  
給率の向上への貢献」、「食品の安  
全性の確保等における食育の役  
割」の七項目が謳ってある。

食育推進基本計画では推進の目  
標が掲げられ、学校給食がすべて  
関係するわけではないものの、基  
本的施策として学校給食の役割の  
重要性や栄養教諭の役割の重要性  
が積極的に推進されることになっ  
ている。並行して学校給食法に基  
づき学校給食実施基準が全面改正  
(二〇〇九年)され、現在に至っ  
ている。

つまり、「クジラを食べていた  
ころ」は、高度経済成長期の食と  
くらしの変化を描き出すことで、  
現在の学校給食を考える視点も提  
供しているのではないかと、といっ  
ことである。

このような視点にたったとき、  
名古屋市の学校給食の小学校給食  
の献立は、一カ月の食料費三八〇〇  
円の価格で良く努力がなされてお  
り、苦勞の様子が見て取れる。

平成二三年度の特徴は、月々の  
テーマを掲げ(例えば「一月 伝  
統的な食べ物を知ろう」)食への  
取り組みが企画されていること  
で、名古屋市との姉妹・友好都市  
(メキシコ市・ロサンゼルス市・  
トリノ市・シドニー市・南京市)  
との提携月には、特別献立も実施  
されている。

また、地産地消費材として、植  
物性食品では港区南陽地区で取れ  
た米「愛知のかおり」や米パンが  
提供され、愛知特産・近郊の野菜  
や堆肥から作られた野菜が所々に  
利用されている。動物性食品では  
愛知三河湾特産のニギス、鶏肉は  
名古屋コーチン等も使用されてい  
る。ふるさと料理や、シチューや  
カレー等は手づくりのルーから作  
成され、味噌汁や煮物等のだしは  
煮干しやムロアジ、しいたけから  
摂られたり、アレルギー対策も行  
われ、種々な工夫が散りばめられ  
ている。

中学校給食についても、二一世  
紀を展望した豊かな給食をイメー  
ジし、スクールランチと称して実  
施されている(名古屋市が発生と  
されている)。

学校給食は、児童・生徒への健  
康や人とのコミュニケーション等  
幅広い角度で大きく貢献してお

り、関係者の方々の努力に敬意を  
払いたい。

クジラは、現在は和歌山県の太  
地町で伝統食文化として提供され  
ているようであるが、今では高価  
な食材となっており、地元でない  
と地産地消の観点から難しいかも  
しれない。しかし、南水洋で捕獲  
されたクジラは汚染を心配する恐  
れが未だないようなので、ある程  
度は、日本食文化の一端としても  
栄養・アレルギーなどの観点から  
も、食材として考慮されても良い  
のではと思う。

クジラを捕る是非の議論には、  
科学や国際条約以外の要素が絡ん  
でいるように思われる。海洋生態  
系を考えれば、頂点にいるクジラ  
だけが一方的に保護され過ぎる  
と、他の魚類の生態系は、漁業関  
係者が関与しなくても崩壊し、海  
洋汚染の環境破壊にも繋がること  
は必至とされている。我々人類に  
課せられた自然との共生と共存で  
は、その結果に於いてバランスの  
良い環境保護が必要なのであろう。

イサナトリ、ウミベヲサシテ、ニ  
ギタツノ、アリソノウエニ、カア  
ヲナル、タマモオキツモ、…  
(万葉集、柿本人麻呂)

大海の 磯もどろに 余する波  
われてくだけて さけてちるかも  
(金槐和歌集、源実朝)

荒海や 佐渡によこたふ 天の河  
(奥の細道、松尾芭蕉)

十六夜 くぢら来そめし 熊野浦  
(与謝蕪村)

一番は 逃げて跡なし 鯨突  
(炭太祇)

うみは ひろいな おおきいな  
つきはのぼるし ひはしずむ  
うみは おおなみ あおいなみ  
ゆれてどこまで つづくやら  
うみに おふねを うかばせて  
いつてみたいな よそのくに  
(童謡、林柳波)

東海の 小島の磯の 白砂に  
われ泣きぬれて 蟹とたわむる  
(石川啄木)

捕鯨船 唄れたる  
汽笛を ならしけり  
(山口誓子)

れんぎょうに  
巨鯨の影の 月日かな  
(金子兜太)

グローバル社会を歩く②  
島に生きる一聞き書き  
能登島大橋架橋のまえとあと

赤嶺淳・森山奈美 編  
グローバル社会を歩く研究会発行  
新泉社販売 2012 (192頁)

名古屋市立大学大学院人間文化研究科

(あかみね・じゅん)  
赤嶺 淳



本書は、二〇一一年九月に能登島(石川県七尾市)で実施した「学外研修」(国内フィールドワーク)の報告書です。実習には学部生一八名と東北大学から二名の科目等履修生が参加してくれました。周囲を海にかこまれた能登島(面積およそ四七平方キロメートル)の主要な産業は農業と水産業です。ゆたかな自然にめぐまれているも、能登島は過疎と高齢化という問題に直面しています。島の生活を大きく変化させた要

因のひとつとして、一九八二年に開通した能登島大橋の存在が指摘できます。「楽どころじゃねえわいな」と、あるインフォーマントがこたえてくれたように、人びとの生活は飛躍的に便利になりました。また、架橋を契機として、水族館や美術館が開館し、能登島の主要産業のひとつに観光業がくわりました。今回、わたしたちは、開通から三〇年をむかえる能登島大橋に注目し、架橋前後の生活変容を訊くとともに、能登島における「島おこし」の現状と課題について「聞き書き」をおこないました。フィールドワークを研究手法にすえながらも、わたし自身は、学生時代に調査法の講義をうけたこともなければ、そうした実習に参加した経験もありません。実習を加した経験もありません。実習を構想するにあたっては、これまでの二〇年ばかりの調査経験をふりかえりながら、暗中模索してきたというのが実情です。八年ほど試行錯誤をくりかえし、現在の「聞き書き」を中心としたスタイルにおちつきました。

実習は、現場に学び、現場で考える絶好の機会です。こうした場を医学系の臨床教育にならない、わたしは臨地教育とよんでいます。臨地教育は、まさに「無知の知」を自覚し、次なる課題を発見する場といつてよいでしょう。その一方で、短期間に二〇数名がおしかける実習は、ひきうけてくれる地域社会に、かなりの負担を強いるという問題点も内包しています。いくら教育の一環とはいえ、一方的な搾取というイメージもぬぐいがたく、わたし自身、実習を「必要悪」と割り切ってきたというのが正直なところです。

実習に関するネガティブ観が揺らいできたのは、二〇〇九年に静岡県で実施した「聞き書き講座in御前崎」を契機としています。かつて鯨節の調査でお世話になった川口博康さんから、手火山式といわれる古式製造法を継承する人びとへの聞き書きを依頼されたのです。二〇一一年、川口さんは故人となりましたが、わたしたちの報告書『カツオでにぎわっていたころー聞き書き・御前崎の歴史』を喜んでくださり、続編の刊行を期待してくださっていました。

御前崎では、実習プログラムを川口さんと企画し、最終日に関係者をまねいて発表会を開催できたことが、収穫でした。現地の人びとと協働する過程で、現地側のニーズを把握でき、多少なりとも現地に歓迎される実習が可能となることに気づいたからです。逆にいえば、それまでは、現地側の負担を危惧するあまり、わたしひとりが孤軍奮闘していたのです。

わたしの関心は、高度経済成長期に定着し、それ以降に肥大化をつづける、わたしたちの生活様式が東南アジア社会にあたえてきた影響にあります。バナナもしかり、エビもしかりです。

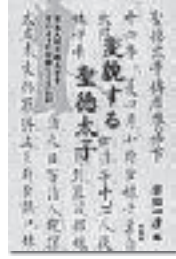
そうした意味からも、学生たちと津々浦々で高度経済成長の経験を訊く作業は、自身の研究の延長上にあります。とはいえ、一九六七年生まれのわたしにとって、高度成長は所与のことであり、それ以前の生活など映像による疑似体験にすぎません。況んや学生においてをや。

人びとが語ってくれる個人史を、深層部分まで理解するには、学生のみならずわたし自身の勉強も問われます。こうしたことから、戦前から高度成長期に日本列島各地をくまなく歩き、今日でいうところの「町おこし」を指導してあるいた世間師・宮本常一の著作集全五〇巻を読破しようと思いましたが、地域の人びとはもとより、うちなる宮本とも対話しながら、調査実習を進化させていきたいと考えています。

変貌する聖徳太子  
日本人は聖徳太子をどのように信仰してきたか

吉田一彦 編  
平凡社 2011 (347頁)

名古屋市長立大学大学院人間文化研究科  
(よしだ・かずひこ)  
吉田一彦



日本には、聖徳太子を仏や菩薩と同じような聖人として信仰する「聖徳太子信仰」が見られる。聖徳太子信仰は、奈良時代にはじまり、平安時代、鎌倉時代、南北朝・室町時代を通じて発展、隆盛し、江戸時代、そして近代に至るまで続いてきた。ここでは、聖徳太子による数々の奇跡の物語が語られ、彼は実は救世観音という観音菩薩が姿を変えてこの世に現れた存在（観音菩薩の垂迹）であると説かれ、聖徳太子像が絵画や彫

刻に描かれてまつられてきた。その信仰の姿を具体的に、そして構造的に解析することは、日本の文化の個性や特色がどのようなところにあるのかを考える上で大きな手がかりを与えてくれる。

『変貌する聖徳太子』と題したこの書物は、聖徳太子信仰の発展の様相を仏教史研究、思想史研究、古代中世史研究、文学研究、美術史研究などの方面から複合的に考察し、その歴史と文化を明らかにしようとしたもので、九人の著者による論文十篇、およびコラム三篇から構成されている。筆者は、このうち序論、論文一篇、コラム二篇を担当した。

拙論「聖徳太子信仰の基調——四天王寺と法隆寺」では、聖徳太子信仰の基調を作ったのは四天王寺、法隆寺、広隆寺、橘寺などの聖徳太子由緒寺院であったこと、これらの寺院は協調関係にあるというより、むしろ対抗関係にあり、たがいの言説を否定したり、吸収しようとする主張を展開していたこと、聖徳太子についての複数の伝記はこれらの寺院がそれぞれの主張を述べたものであること、などを論じている。

聖徳太子の伝記が一つではなく、いくつもあり、それぞれに記

載内容が違っているというと驚かれるであろうか。しかし、事実はそうである。しかも、生まれた年やら、亡くなった年月日、年齢といった基本情報にすら違いがある。なぜそうなったのか。拙論では、『聖徳太子伝暦』は四天王寺系、『上宮聖徳法王帝説』は法隆寺系、『上宮聖徳太子伝補闕記』は広隆寺系の伝記であることを明らかにし、そこからそれぞれの伝記、説話を読み解いた。

「コラム・『異本上宮太子伝』の写本と内容」では、日本大学と広島大学に所蔵される『異本上宮太子伝』の影写本の実見調査に基づいて、その伝来について明らかにし、あわせてこの書を「七代記」とみなす理解は妥当ではないことを論じている。

他にも本書には、法隆寺東院で展開した聖徳太子信仰のこと、唐の僧思託が書いた聖徳太子伝のこと、聖徳太子五百年忌（没後五百年記念の遠忌）の頃に法隆寺、広隆寺、四天王寺で展開された聖徳太子信仰のこと、聖徳太子が蝦夷を武力ではなく教諭によって帰順させたと言語の説話の意味すること、聖徳太子が未来を予言した書「聖徳太子未来記」がしばしば出現したこと、叡尊・忍性などの律

宗による聖徳太子信仰の活動のこと、親鸞およびその門流で展開した聖徳太子信仰の特質とその和讃のこと、聖徳太子の一生の行実を絵画に描いた「聖徳太子絵伝」の解説のこと、などを論じた論考が収められている。

筆者も、もう一つ、親鸞とその弟子たちによる、阿弥陀信仰（浄土教）と聖徳太子信仰とが結合した仏教が、どのような系譜から誕生したものであるのかを考察するコラムを書いている。親鸞の仏教を解明するには、彼の聖徳太子信仰を正面から見すえ、その意味と位置とを考察することが不可欠の課題になると私は考えている。

聖徳太子信仰の解明は、日本の文化、思想、宗教などを考える上で多くの思考題材を与えてくれる。本書は、聖徳太子信仰の解析を通じて、日本の文化史、思想史の深奥に流れる特質を明らかにしようとするものである。気軽に手にとっていただき、聖徳太子信仰の世界に触れていただければ幸いである。

本書はイギリスの政治哲学者デヴィッド・ミラーが二〇〇七年に著した *National Responsibility and Global Justice* の全訳である。ミラーはオックスフォード大学教授で世界の政治哲学をリードする論客の一人である。日本では『一冊で分かる政治哲学』(岩波書店)の著者として知られている。ミラーはヒューム研究からその研究生活をスタートさせ、その後、社会正義に関する膨大な研究を発表している。政治的には、行き過ぎ



国際正義とは何か  
—グローバル化とネーションとしての責任

デヴィッド・ミラー 著  
富沢克・伊藤恭彦・長谷川一年・  
施光恒・竹島博之 訳  
風行社 2011 (368頁)

名古屋市立大学大学院人間文化研究科  
(いとう・やすひこ)  
伊藤 恭彦

た市場経済を抑制する福祉国家体制を擁護しているが、理想の体制として市場を国家が規制するだけでなく、企業体を従業員がコントロールする自主管理型企業を組み込んだ「市場社会主義」を唱えている。その意味でイギリスの左派を代表する思想家でもある。二〇一一年七月初来日し、名古屋を含め、日本の各地で精力的にセミナーを開催した。

ミラーは一九九〇年代以降、ナショナリズム(ナショナリティ、ネーションの意義)についての研究を発信し始めた。その成果は『ナショナリティについて』(風行社)として日本語で読むことができている。ミラーは社会正義研究を通して、分配的正義が文脈依存的な概念であることを明らかにした。例えば、ある財を分配する場合、家族という関係(文脈)と会社という関係(文脈)とでは正しい分配の基準が変わってくる。このような関係を無視し普遍的な分配基準を構想することは不可能だというのがミラーの立場である。そして、この文脈は文化によって形成される。つまり、分配基準は文化によって異なるというわけだ。この視点は一九八〇年代に争われた、いわゆるリベラリズムとコミュニタリ

アニズムの論争を総括したものと見える。さらに、ここから導き出されるのは、正義を構想する際の文化共同体のもつ積極的な意義である。強力な分配的正義を擁護しようとするミラーがネーションという文化共同体の重要性に到達したのは、このような理論展開があったからだ。

さて『国際正義とは何か』は、ミラーが自らの社会正義研究とナショナリティ研究を踏まえ、世界の貧困問題に対応するグローバルな正義を提示したものである。ミラーは貧困問題をはじめとした世界の悲惨な出来事に対して、二つの視点で捉えることを提唱する。

一つは人間は自由に行動し、その結果について責任を負う主体であることである。これを結果責任という。もう一つはあまりに悲惨な状況に置かれている他者を救済する責任である。これを救済責任という。私たちは世界の貧困者の過酷な状況を見たとき、すぐに手を差し伸べようとする。あるいはさうらに進んで世界の不平等を一気に是正することを構想するかもしれない。ミラーはそのような短絡的な態度を戒める。というのは、そのようなやりかたは、結果責任を曖昧にするからだ。ここには二つ

の意味がある。一つは、貧困国自身が自らの行為の結果に責任をとらなければならないという結果責任が貧困国に課せられる場合があることである。もう一つは、ある国の貧困な状態に責任を負うべき別の国、すなわち、ある国の貧困に対して明確に結果責任を負う国が存在するということだ。一見すると人間的に思える援助も、時によっては結果責任を曖昧にするという倫理的に問題含みの結果を伴うというわけだ。

他方で、ミラーは結果責任が明確になるまで悲惨な状況に置かれた人々を放置してよいとは考えない。貧困が人間の基本的ニーズを奪っている場合、それは明確な人権侵害だとミラーは言う。その場合、私たちは貧困国に対して救済する責任を負う。人権保障という「グローバル・ミニマム」を実現する規範が、グローバルな正義なのである。

このようなグローバルな正義論は、近年、コスモポリタニズムと呼ばれる人々が提唱するグローバルな正義とは異なる。例えば、トマス・ポッゲは植民地支配から始まる現在の世界の経済構造を改革することをグローバルな正義の課題だとする。あるいはダレル・メイ

レンドルフはグローバルな機会の平等こそがグローバルな正義だと言う。このようなグローバルな正義論に比べるとミラーの議論は穏当なものである。穏当であるから現状追認的でもあるが、逆に実現可能な規範であるとも言える。

訳者の一人としてミラーのグローバルな正義論からは多くのことを学んだ。特にグローバルバリエーションが進展したからこそ踏まえなくてはならないネーションの意義とそれを土台にした公正な国際関係の可能性については非常に示唆的である。とは言え、私はミラーのグローバルな正義論については、強い違和感をもっている。それは彼が前提にしている国際関係論があまりにウエストフアリア的だという点にある。グローバルバリエーションが進展したとは言え、政治の基本単位は国民国家である。しかし、特に冷戦の崩壊後、国民国家以外のアクター（国家間組織、超国家組織、トランスナショナルな組織）が登場し、国際政治において重要な役割を果たし、同時に国際政治の経路を複雑にしている。このような事態を考えれば、ネーションとネーションの関係だけでなく、グローバルな正義を語ることは時代遅れだと思われる。

もう一つの違和感は地球規模での問題を引き起こしているグローバル市場経済の評価があまりに甘いことである。グローバル市場経済はほとんどネーションを暴力的に巻き込み、ネーションの運命を左右している。しかし、それは市場経済である以上、そこでの個々の行為に責任を問うことはできない。全ての市場参加者が合法的に活動していても、結果的に極端な格差や底辺での深刻な貧困が発生する。私は、こうした市場の暴力性を規制することがグローバルな正義の第一の課題でなくてはならないと考える。このようなグローバルな正義はネーションとネーションの関係でも、責任という言説でも解くことができないと考えられる。

私自身はミラーの議論に対して以上のような違和感をもっている。とは言え、本書は私たち日本人に多くの問題を投げかけてくれる良書であることは間違いない。

ミラーが投げかけた最大の問題はネーションとは何かということである。日本では戦後長くナショナリズムへの警戒感からネーションについて突き詰めた議論をすることが敬遠されてきた。私たちに

問い自体、日本人の中ではほとんど共有されてこなかった。東日本大震災後、私たちは日本とはどんな共同体なのか真剣に考え始めている。これはネーションという倫理的共同体の意義を再考することだと言える。その際、注意しなくてはならないのは、ナショナル・アイデンティティは固定したものであるという点だ。ミラーはナショナル・アイデンティティが常に構成員の熟慮に開かれたもので、修正されていくもののだとしている。日本におけるナシヨナリズム論はすぐに「〇〇が日本人の本質だ」といった固定した議論に陥りやすい。そして、そうした議論は異質な他者を排除する言説として政治的に猛威をふるう場合がある。ネーションを冷静に考える上でミラーの議論はとても参考になる。

さらにミラーのネーションについての議論は、国境の向こう側にいる人々への責任とも結びついている。これも私たちの思考から抜け落ちやすい点だ。ネーションを内向きに論じてはならない。例えば、現代の争点であるTPP問題も、参加することが日本のメリットになるのかわからないのかといった単純な国益論か、メリットとデ

メリットの比較考量が必要だという議論しかない。ミラーのようにネーションの対外的責任、とりわけ日本のような富裕国の責任を真剣に考えるならば、TPP論議ももう少しまともになるように思える。

グローバルバリエーションとネーションの意義、ネーションの責任を曖昧にしないグローバルな正義の可能性といった理論的な問題に関心をもっている方だけでなく、グローバルバリエーションの中で日本はどのような生き方を選択すべきなのかという問題で悩んでいる方にも、本書を読んでいただきたいと思う。